

2022. 10. 1

試論 明科廃寺

安曇氏と蘇我氏の盛衰に見る

川崎克之

明科廃寺については未だ核心部分の発掘はなされていないが考古学的には様々なことが解ってきた。

創建の時期について、従来は7世紀の第3四半期に創建された信濃最古の古代寺院とされてきたが、原明芳の最新論考「安曇郡の古代を考える」(1)では7世紀の第4四半期に創建されたとしている。どうやら信濃最古の寺院ということではなくなりそうであるが、創建時期についてはさらなる検証が必要と思われる。

隣接する栄町遺跡は7世紀前半から7世紀末あるいは8世紀初頭の寺院を支えたと思われる氏族の住居跡であり、潮古墳群は明科廃寺が造られた時代とほぼ一致していることから彼らの墳墓と考えられ、銀装の刀装具や馬の歯が出土している。また上手屋敷遺跡には1メートル四方の柱穴があり、大規模な掘立柱建物が想定され、隣接する竪穴建物からは圈足円面硯が出土している。採集された須恵器は7世紀から9世紀前葉の物が多い。栄町遺跡と比較すると重なるがやや長く存続したと考えられるとしている。

これらについて、誰が何のために、どのような時代背景の中で建立したのか、もう少し踏み込んだ解釈が欲しいところだが、考古学の方々は慎重で、なかなか思い切ったことを語っていただけない。そこで、アマチュアの特権?を行使して、考古学的成果の都合の良いつまみ食いとのそしりを覚悟の上でこれまでの先人の考え方を整理しつつ、私なりの試論を紹介してみたい。

まずは大方の期待?通り明科廃寺は安曇氏族が創建したという仮説を前提としてみたい。この手法は犯罪捜査で言えば、まず犯人を決めてから証拠を集めて論証するようなもので、全くの邪道であることは承知の上ではある。私の拙い試論の欠陥や綻びを指摘して頂くことで新しい課題や突破口が見つければ嬉しい。

ただ、「安曇族」ではなく「安曇氏族」である。刈間健志が「安曇族はいなかった?」(2)で論考しているように、「安曇族」なる用語は弥生時代における初期天皇の実在性の傍証とするために案出された皇国史観の所産といえる。阿曇連や阿曇犬養連など日本書紀等に明示されている氏族を、その名も無かった弥生時代まで遡らせて「初期天皇」を支えたと主張するためだ。

明科廃寺の創建時期は仏教の受容のおよそ1世紀半後、蘇我本宗家が乙巳の変で滅んで間もない頃だ。そこに何らかの関係性はあるのだろうか。仏教の導入を推進した蘇我氏と阿曇氏の関係を阿曇氏勃興の時期まで遡ることから検討してみよう。

注：本稿では和銅6年(713)の好字令までは阿曇、以後は安曇と表記する。

1, 阿曇氏の盛衰

応神天皇3年(272)海人の反乱を阿曇連の祖・大濱宿禰が鎮めて海人の宰(みこともち)に任ぜられて各地の海部を統率するようになった。金井恂(3)によれば、この大濱宿禰の拠点は畿内にあり、播磨国の五色塚古墳は安曇氏族の墳墓と推測されるとし、仁徳天皇の時代に摂津国難波の堀江の開削に関わることで安曇江を入手したとしている。

大和王権と結びついた阿曇氏は、安曇江を拠点として各地の海部や安曇部から海路によって貢納された海産物等を収納して天皇の御食に供する内膳職を務めていた。

しかし、履中天皇2年(401)阿曇連浜子が住吉仲皇子の反乱に加担して墨刑に処せられてしまう。阿曇連が海人の宰(みこともち)として海人を統率していたのは約130年間ということになる。浜子が阿曇連宗家の主であったかどうかは不明だが、これ以後阿曇連氏は暫く日本書紀から姿を消し、再び日本書紀に現れるのは約200年後の推古朝の時である。この間の動静は全く不明だが、反乱に加担して罰せられた一方で、海産物の貢納の義務は引き続き負わされ、各地の海人との関係は続いていたと考えられる。

蘇我氏に接近して復権

新興の蘇我氏は蘇我稲目の時代に3人の娘を天皇家に入れて外戚となった。また多くの同族を大夫(マエツキミ)に取り立てて朝議を主導し、さらに同族の膳職を通じて内廷を掌握するなど、所謂血のネットワークによって権力の基盤を作り上げた。また外廷においても、王権の財政を担う屯倉の経営を通じて大蔵を掌握していた。勢威挽回を狙う阿曇氏と新興の蘇我氏とは様々な活動分野において利害関係で共通するものがあった。阿曇氏は蘇我氏の隆盛に関わる様々な活動に密接に関与することによって復権したと考えられる。屯倉、外交、仏教、内膳のそれぞれにおいて両者の関係を見てみよう。

屯倉関係

蘇我稲目は渡来人の能力や技術を活用して王権の直轄地である屯倉の経営を推進して、外廷の中心的官司である大蔵を掌握、これを足場にして権勢の座についた。渡来人は仏教公伝以前から仏教を信仰しており、渡来人との関係が深かった蘇我氏が早くから仏教に理解を示し受容に積極的であった由縁でもある。(4)

推古天皇の時代になると全国に屯倉の設置を推進して地方豪族である国造(くにのみやつこ)の地方権力を制限して中央集権体制作りを目指した。

これらの屯倉の守衛のために犬養部を設置して阿曇犬養連氏など伴造(とものみやつこ)にこれを統率させた。犬養部は犬を飼育して野獣から屯倉を守ったのが始めとされる。しかし、地方豪族の支配領域を割り取って屯倉を設置するためには、相応の武力を要したと推測され犬養部を管掌する伴造は軍事氏族化していったと考えられる。安曇氏族で言えば、阿曇犬養氏と海犬養氏がそれに当たる。この阿曇犬養氏が信濃に進出してきたという説があり、これについては後述する。

外交関係

阿曇連氏が西海使（外交官）としての活躍を見せるのは推古天皇の時代からで、推古32年（623）には新羅が任那を攻めて降伏させたことに関連して、阿曇連が蘇我馬子に勧めて軍を起こさせようとしたが「軍を起こすのが早すぎたので新羅から賄賂を得られなかった」と馬子が嘯いた記事が日本書紀にある。蘇我氏との密着ぶりを示す逸話ではある。しかし、乙巳の変で蘇我本宗家が滅びた後も、白村江の戦や壬申の乱を経ても阿曇連氏は外交官としての活躍を日本書紀に見せており、蘇我氏に一方的に隷属したという関係ではなかったようだ。

仏教関係

蘇我氏と阿曇氏の関係の深さを明瞭に物語るのは仏教の導入においてである。

導入期の仏教は伽藍仏教であり、伽藍の建立には建築・造仏に従事する技術者や工人が必要で、導入期には渡来人に依存するしかなかった。蘇我氏は渡来氏族の倭漢直氏を通じて彼らを掌握しており、他の豪族が寺院を建立するためには蘇我氏の協力が必要だった。即ち蘇我氏の権勢と富の源泉は仏教ビジネスにあったと言える。阿曇連氏は西海使として百済との外交に携わっていたので早くから仏教に接しており、百済からの仏教公伝に深く関わっていたと推測される。蘇我氏とのいわば二人三脚で仏教の導入を推進したと言えるのではなかろうか。こうしたことから推古2年（594）の推古天皇の詔にいち早く応えて他の豪族にさきがけて難波に氏寺の安曇寺を建立したと考えられる。

さらに推古32年（624）には阿曇連が寺や僧尼を監督する法頭に任命されている。僧尼の統制機関は蘇我氏の氏寺・法興寺（飛鳥寺）に置かれていたので、法頭となった阿曇連は法興寺に出仕していた可能性があり、ここでも蘇我氏との関係の深さが知られる。また阿曇氏の安曇寺には蘇我入鹿の師であった僧旻が病床に伏して白雉4年（653）に孝徳天皇が見舞っている。僧旻を通じての仏教や王権との繋がりも見える。（僧旻は蘇我入鹿や中臣鎌足の師でもあり、国博士として大化の改新の諸施策を推進した）

内膳関係

蘇我氏は天皇に近侍して食膳奉仕を務める同族を通じて内廷を掌握していた(5)が、阿曇連も古くから膳職にあり、蘇我氏やその同族と接点があった。阿曇連氏の内膳司における奉膳職は天皇の御食の毒味役でもあり、日常的に天皇に近侍する役職であった。

推古天皇32年（624）蘇我馬子は内膳職にある阿曇連と阿部臣麻呂とを使って、葛城県を下賜して欲しいということを推古天皇に奏上させる出来事があった。天皇に近侍する阿曇氏ならではの役割で、馬子の従妹にあたる推古天皇に領地を要求するには同族でない阿曇連から奏上させることが得策だと考えたのだろう。

阿曇連氏は内膳司の役職によって各地に安曇部を設置して天皇の御食の食材確保に努めており、また、後年には御食国（みけつくに）とされる信濃国や淡路国、また若狭国の国司に任命された者も輩出している。阿曇連氏の勢威の源泉は内膳司という天皇に近侍する役職にあったと考える事ができる。

また、全国に分布する安曇氏族ゆかりの地とされる地は、安曇氏族の東進の足跡を物語るものではなく、内膳司の役職に基づいて管掌した海部や安曇部の所在地だったと考えるのが妥当だ。

2, 安曇野に進出してきた安曇氏族

以上見てきたように、蘇我氏の権力の源泉の多くの部分に安曇氏族が関わっており、安曇氏族と蘇我氏とは持ちつ持たれつに関係にあり、安曇氏族の安曇野への進出はこの延長線上にあったと考えられる。安曇野に進出してきたのは阿曇連氏か、それとも阿曇犬養連氏なのか。そもそも阿曇連氏と阿曇犬養連氏、さらに安曇部氏とはどのような関係にあるのだろうか。これまでこれらを区別して語られることはなかった。むしろ意識的に混同して「安曇族」という括りで語られることが多かったように思われる。まず阿曇連氏と阿曇犬養連氏との関係を見てみよう。

阿曇連氏と阿曇犬養連氏

阿曇連は『古事記』(712年)には「綿津見神の兒、宇都志日金柝命の子孫なり」と記され、また『新撰姓氏録』(815年)には「綿積神の兒、穗高見命の後裔」で本貫は河内とある。難波堀江の開削によって河内湖が陸地化したので阿曇連の一部は内陸の河内国に進出したと考えられる。

河内は蘇我本宗家の滅亡に関与した蘇我倉氏の勢力圏であり、同氏との関係もあったと推測され、蘇我本宗家が滅亡した後も生き残った一因とも考えられる。また、阿曇宿禰は「海神綿積豊玉彦の兒・穗高見命の後裔」で本貫は右京だとしている。天武天皇13年(684)に八色の姓が制定され、この時に中央の阿曇連氏は「宿禰」の姓を受けられて阿曇宿禰氏となっている。河内国に残った者は「連」とどまり、右京に移り住んだ本家筋の者が「宿禰」となった。内膳司の役職に就いていたのはこの系統と考えられる。

一方の阿曇犬養連は『新撰姓氏録』では「海神大和多羅命三世孫穗己都久(ほこつく)命之後也」とあり摂津国が本貫の地となっている。阿曇連氏のうち、犬養部を管掌する伴造となった支族とみられる。宝賀寿男(6)は、大浜宿禰の次男の末裔の阿曇犬養連の子・船麻呂が安曇郡に定着して穂高神社を奉斎したとしている。

摂津国で生まれた阿曇犬養連氏

さて、前に進むためにはここで混乱を整理しておかねならない。摂津国における阿曇連氏(阿曇宿禰氏)と阿曇犬養連氏との関係性についてである。

金井恂(3)によれば、摂津難波に進出した阿曇連氏は、大阪湾と内陸の河内湖を繋ぐ難波堀江の開削に貢献して安曇江の地を獲得し、後に阿曇氏の氏寺・安曇寺を建立するなど、安曇氏族の根拠地としたとしている。

瀬戸内航路の船舶は大阪湾から難波堀江を通して難波津に着き、そのまま河内湖に流入している河川を通じて大和や山城方面に物資を輸送できるようになったので、難波津はそれまでの住吉津に代わって隆盛を極めるようになった。阿曇連氏はその一角を手

に入れたのだ。

難波津には朝廷への貢納物を取めるクラや外国使節を迎える外交館をはじめ蘇我氏など有力豪族が西日本に所有する土地や民からの貢納物を集積するクラや宅が多数造られた。これらのクラや西日本各地の屯倉を守衛するために犬養部が設置され、それを管掌する伴造として五つの氏族が生まれた。そのうちの一つが阿曇犬養連氏で、阿曇連氏の一部を割いて誕生した。即ち阿曇犬養連氏は阿曇連氏から分かれた支族という関係になる。阿曇犬養連氏が摂津を本貫の地とするのはこの地に誕生したことによる。阿曇犬養連氏はクラや館の守衛の職務を通じて軍事氏族化したと考えられる。また各地の屯倉を繋ぐ海上交通や交易の実働部隊であった可能性もある。これまで阿曇連氏の性格として語られてきたこれらの特徴は実は阿曇犬養連氏のものだったのだ。

一方の阿曇連氏は王権の近くにあって内膳司や西海使（外交官）の職務を担うことによって宮廷貴族化していった。安曇氏族はこの二氏が車の両輪のように連携しながら隆盛したと考えられる。安曇野にもこの二氏が連携して進出してきた。

安曇氏族の地方進出

豪族・国造等が支配する地方に進出することは大和王権を背景としなければ不可能だった。また、地方豪族の支配領域を切り取って屯倉を設置するのだから武力行使を伴うこともあったと考えられる。阿曇犬養連氏は屯倉の設置や守衛のために犬養部を率いて軍事氏族化しており、地方進出の先兵でもあったと考えられる。

黛弘道（7）は「犬養の地名は屯倉の近くに多くあることから、犬甘島（島内村）は阿曇犬養氏の故地であり、隣接する辛犬郷付近に屯倉が存在した」としている。

笹川尚紀（8）は「6世紀中葉以降、蘇我氏が筑摩郡にソガ部（塩尻市宗賀）を設定してその勢力を扶植、それに呼応して同郡の北部地域周辺に屯倉が設置され、その管理者として阿曇氏が派遣された」としている。但し阿曇氏と阿曇犬養氏とを区別していない。

桐原健（9）は「蘇我氏は大伴・物部に比べれば後出の氏族だから地方への進出も遅れている。遺されている信濃の松本平に対して北半を安曇氏に譲り、少しでも有利な南半を選んだ。橋頭堡は東漢氏傘下の辛犬養・錦服氏が運営の実務を担当している深志凹地のミヤケで、彼らを管掌できる官司の上下関係を利しての蘇我氏介入は容易である。」としている。

これら三氏の説は阿曇犬養氏（または阿曇氏）が先か、それとも蘇我氏が先かという相異はあるが、阿曇氏族の進出は筑摩郡への屯倉の設置に伴う進出であるとする点で一致している。しかし、屯倉の設置と蘇我氏及び阿曇犬養氏の信濃進出については推論の域を出るものではなく、各地の事例をもって傍証とする必要がある。蘇我氏は全国で屯倉の設置に便乗してソガ部を設定したとも、物部氏を滅亡させて物部を奪ったともされており（4）、他地方の屯倉とソガ部の所在地とその近隣に安曇氏族が存在したことを立証することが課題となる。

3, 犬甘島は安曇野進出の橋頭堡

信濃に進出してきた阿曇犬養氏は先住民を囲い込んで犬養部とし、犬甘島と犬飼山付近(現・島内)を拠点として隣接する筑摩郡辛犬郷に屯倉を設置・守衛した。その後、阿曇犬養氏は辛犬郷に居住していた渡来系氏族の辛犬甘氏に屯倉管理を譲るかして地方豪族の影響下のない空白地帯の安曇野に進出した。それは郡制度の成立以前のことであった。犬甘島は奈良井川と梓川の合流地点に形成された島状の地域で、大和王権を背景にしての進出とはいえ、地元豪族の脅威に備える必要もあり河川に囲まれた犬甘島と犬飼山は守備に適した土地だったと言える。また、安曇郡への進出の橋頭堡でもあった。

阿曇氏族が安曇野に進出する以前に犬甘島に定着していたとの説は黛・笹川両氏以外にも何人かの先学によって唱えられているので紹介しておきたい。

宮地直一(10)と栗岩英治(11)はともに阿曇犬養氏は弥生時代に犬甘島に進出したとしている。

一志茂樹(12)は、犬甘島は古くは阿曇氏が開拓し、その後に後継者として辛犬甘氏が進出してきたとして阿曇犬養氏の存在を否定している。

これら三氏に共通するのは、安曇氏族の進出時期を弥生時代としていて、屯倉の設置や蘇我氏との関係については言及していないことだ。安曇平に弥生遺跡が少なく松本平に多いことをもって、安曇氏族は先に松本平に入って、後に安曇平に移動したとしている。しかし、弥生遺跡の存在をもって弥生時代に安曇氏が進出したとするのは無理がある。その後安曇平にも弥生遺跡が発見されている。また、そもそも阿曇犬養氏という氏族そのものが弥生時代には存在していない。屯倉の設置に伴って創出された伴造(とものみやつこ)なのだから。

4, 明科は安曇郡高家郷

安曇氏族は犬甘島を橋頭堡として、犀川右岸の東山段丘ルートで明科に進出した。東山段丘上は北村遺跡をはじめとする縄文時代からの遺跡が点在し、古道によって繋がれている早くから開けた地域なので、進出には地元の抵抗があったと推測される。明科の能念寺山古墳は明科を見下ろす山の中腹にあり、先住の豪族の墳墓と考えられる。また東山道に接続する会田街道の明科側出口付近に存在する武士平古墳も気になるところだ。陸上交通と水上交通の要衝である明科には相応の力を有する豪族が存在しており、この地に入るには困難が伴ったことだろう。天皇の御食の食材を確保することを任務とする阿曇連氏は王権を背景にしつつ阿曇犬養氏の武力的援護によって進出できたのだろう。このルート上の地域が和名類聚抄にある安曇郡高家郷となった。

当会会長の百瀬新治(13)は安曇郡南部の古代集落の変遷を検証して、これまで高家郷に比定されてきた豊科・三郷・梓川などには古墳・集落と言えるものが存在せず深い森と原野であり、高家郷の位置を合理的に説明できる場所は明科だと指摘する。また原明芳(1)も「明科地区の南に古墳の存在しない空白地帯が存在する。この空白の北の

範囲、明科・穂高以北が安曇郡であり、梓川以南が筑摩郡になり、明科地区は安曇郡の中で最も南になる」として、明科が高家郷だったとする。和名類聚抄によれば高家郷は全国に15ヶ所あり、黛弘道(7)は「高家は国の施設に準じた施設があった場所」としている。

他に想定されるルートは、これまで高家郷と考えられてきた豊科・三郷などの梓川左岸エリアだが、百瀬新治によればこのエリアに集落が成立するのは9世紀ということなので、進出ルートの可能性は低い。大和岩雄(14)は阿曇犬養連氏が本貫の地・撰津で住吉大社を祀っていたことを根拠にして、阿曇犬養氏が三郷の住吉荘に住んで住吉神社を祭祀したとしているが、住吉神社の創建年代と集落及び住吉庄の成立年代からすると、9世紀以後に進出してきた別の勢力が奉祀したと考えるべきだろう。

明科の阿曇連氏

一方の阿曇連氏は内膳司の職掌に基づいて御食の食材を確保するために、阿曇犬養連氏の支援によって三川合流の地・明科に進出した。こちらは言わば王権公認の進出となる。この地は鮭漁に適し、水上交通と陸上交通の要衝でもあった。阿曇犬養連氏が中央の阿曇連氏にもたらした情報と支援によって進出したと考えられる。阿曇犬養氏が最初の拠点とした犬甘島も奈良井川と梓川の合流地点にあって江戸時代まで鮭漁が行われていた。阿曇連氏は阿曇犬養連氏と共に既に犬甘島まで来ていた可能性もあるが、より収穫が望める下流の三川合流の地・明科に進出したのだ。時代は下がるが、延喜式の日本海側諸国の貢進物に信濃国からの内膳司年料として楚割鮭・氷頭・鮭子などが記載されている。阿曇連氏が安曇野に進出したことによって貢進が始められたと推測される。阿曇連氏は多人数で進出したのではなく、王権と阿曇犬養氏の武力を背景にして先住の民を囲い込んで安曇部とし、貢進物の確保のために使役したのだ。

阿曇連氏は明科の栄町遺跡付近に居宅を構え、竜宮淵で祭祀を執り行い、墳墓を潮神明宮前に築いた。押野の川会神社の祭神は大綿津見神との伝承があり、阿曇連氏が祖神を祀ったもので、式内社の川会神社は池田町ではなく押野の川会神社と推測する。また、潮8号古墳の周溝からは馬の歯が出土している。郡司層は馬を飼い、一定の武力を保持していたとされることから郡司層の墳墓だと思われ、その郡司こそ阿曇連氏だった。

一方の阿曇犬養連氏は明科から犀川を渡ってさらに穂高方面に進出する。こちらは公的任務ではなく私領確保と馬牧開設を目的としたものだろう。(牧の開設が任務だった可能性はある)縦堰によって西山山麓を開拓、牧を開いて馬を飼い、穂高古墳群を築造、穂高神社を創建したものと推測される。このあたりの事情はさらに検証が必要だろう。

阿曇連氏と阿曇犬養連氏は連携して安曇野地域を支配していたと考えられる。

5、安曇郡の成立

この時期、安曇野には阿曇連氏とその部民の安曇部氏、さらに阿曇犬養連氏が存在し、そして中央の阿曇連氏が信濃国司として赴任したタイミングで氏族名を負う安曇郡

が成立したと考えられる。

蘇我氏が推進した屯倉制は乙巳の変後の大化の改新で廃止された。律令国家の地域支配は、国造ら在地豪族の伝統的な支配力に依拠していたので、乙巳の変直後には地方豪族を過度に刺激しないような配慮が必要な時期もあった。孝徳天皇は派遣する国司や次官の従者の人数まで指示していたほどだ。(日本書紀：大化元年8月5日条) そんな中で大化2年(646)東国の国司の阿曇連氏と次官の膳部臣百依が不法行為を働いたとして孝徳天皇から咎められる事件が起きた。その罪状は、阿曇連は国造に命じて官物を病気見舞いとして贈らせ、湯部の馬を勝手に使い、次官の膳部臣は草代(牧の牧草か)の物を自分の家に取り込み、また国造の馬を取って他人の馬とすりかえたというのだ。この東国とは栗岩英治(15)によれば、「湯部、馬、草代」から推測して信濃国と考えられるとしている。阿曇連氏と膳部臣氏がセットとなっているのも、内膳司の奉膳職を阿曇氏と高橋氏(膳氏)とが対になって担当していた構図と同じで、信濃国が御食国ゆえの発遣と考えられるとしている。

当時の国司は8世紀の初期までは拠点的な郡衙に駐在するか、各郡衙を巡回することによって任務を果たしていたとされる。同族が郡司を務める安曇郡にも滞在していたことは想像に難くない。阿曇連の国司への任官は乙巳の変以前のことで、蘇我氏のバックアップの下に行われたと思われる。まさにこの時期に氏族名を負う安曇郡が成立したのだ。

明科に郡衙(郡役所)があった

阿曇連氏の時代には郡衙は犀川と会田川との合流地点の河岸段丘上にある古殿屋敷遺跡を含む栄町遺跡付近に構えられていたと推測する。当初から役所として建設されたのではなく阿曇連氏の館を活用していた可能性もある。その居館の南側に明科廃寺が建立された。この地は犀川の水上交通、国府と結ぶ川手道、東山道に繋がる会田街道など交通の要衝であり、犀川河畔には河川港が存在していた可能性がある。また、龍門淵には古墳時代の祭祀遺跡があり、会田川右岸には阿曇氏族の墳墓と考えられる潮古墳群も築造された。

6、明科廃寺が創建された時代

創建年代については考古学的見解によると、7世紀の第3四半期説と第4四半期説とがあり、微妙な時間差ながら歴史学的には悩ましいものがある。時代背景が異なることで、安曇氏族と蘇我氏との関係性について異なった推論を行わなければならないからだ。それでは冒頭で自白したように、犯人を決めてから証拠集めと論証を行うという手法の粗雑さが露呈してしまう。だが、敢えて推論を進めてみよう。二つのストーリーが想定できる。

安曇氏と蘇我氏の見果てぬ夢

第3四半期とすると、645年の乙巳の変直後から白村江の敗戦を経て壬申の乱に至る混乱期のまっただ中ということになる。こうした中で阿曇連氏は明科廃寺を建立で

きたのだろうか。乙巳の変による蘇我本宗家の滅亡や 白村江での敗戦は安曇氏族に打撃をもたらさなかったのだろうか？（朝鮮半島で唐・新羅の連合軍と戦ったのは 近畿王朝ではなく九州王朝だとの魅惑的？な説もあるが、ここでは脱線を避けておくことにしたい）

蘇我本宗家の滅亡にも関わらずこの時期の阿曇連氏は 日本書紀に見えるように外交官としての活躍が顕著であり、朝鮮半島への出兵や敗北は阿曇連氏の勢威には影響が無かったと言えるだろう。白村江で戦死したとされる 阿曇連比羅夫は軍人ではないし、戦死もしていない。外交官としての任務を果たして生還している。(16) 阿曇 連氏はその後も内膳司の奉膳（長官）を務めるなど王権 の中枢にあり続けた。従ってこの時期に中央の阿曇氏族 の支援によって創建された可能性が十分考えられる。明科廃寺の創建は、蘇我氏と阿曇氏との連携による安・ 筑支配の集大成として企図され、早くから蘇我氏の協力 により建立に向けての準備が進んでいたと考えられる。蘇我本宗家の滅亡によってその目論見は潰えたが、蘇我 氏配下の工人達が阿曇氏を頼って逃れてきて、逆に建立 時期が早まったとも考えられるのではないか。明科廃寺 の創建は安曇氏族と蘇我本宗家との見果てぬ夢の続きだったのだ。乙巳の変で暗殺された盟友・蘇我入鹿の供養の 為でもあったのかもしれない。

勅命による郡寺の創建

これまでの考古学的通説に従って創建時期を第 3 四半期として、「明科廃寺は安曇氏族と蘇我本宗家の見果てぬ夢」ということで締めくくりたいところであったが、原明芳論稿(1)のインパクトもあって、第4 四半期についても推論せざるを得なくなった。

この時代は、地方を巻き込んだの壬申の乱の余波が続く中、八色の姓（これによって阿曇連は阿曇宿禰となった）が定められて身分秩序が確立され新冠位制度も施行されるなど天武天皇による専制体制が敷かれ律令制に向かって前進した時代だ。

天武 14 年 (685) の天武天皇の詔によって 7 世紀末から 8 世紀初めにかけて全国に寺院の建立されており、明 科廃寺もその一つだったということになる。阿曇連氏が 安曇野に入ってからはほぼ 1 世紀半を経て、安曇郡を建郡 して郡司となり寺院を建立するだけの財力を養っていた。この財力の源泉は明科が水陸両方の交通の要衝にあることから物流に関わることにあったと考えられ、摂津において物流とクラの管理を管掌していた阿曇犬養氏との連携があったことは想像に難くない。また、創建の時期は 安曇連氏が膳職として隆盛を極めていた時代であり、中 央の阿曇連氏と阿曇犬養氏の支援と連携によって建立できたと考えられる。

さらに推測するなら、壬申の乱において大海人皇子（天武天皇）側について駆けつけた信濃の騎兵は阿曇犬 養氏が率いる騎兵だった可能性もあると言える。しかし、勝利に貢献した尾張や美濃には恩賞として税が減免されるなどの恩賞があったが、信濃には与えられなかった（日本書紀：天武 13 年条）。もしかしたら、寺院建立そのものが信濃騎兵への恩賞であり、また戦死者への供養 とされたのかもしれない。

阿曇氏にとって明科廃寺は郡司としての権威を示し王権との繋がりを誇示する威信財であり、この地を永続的に支配しようという意思表示でもあった。

7、安曇連（安曇宿禰）氏の衰退

明科廃寺が完成してから暫くすると中央の安曇氏族の勢威に陰りが見え始めた。百濟の滅亡によって永年百濟との外交に携わってきた阿曇連氏が外交官（西海使）の職を失った。また律令制の推進によって旧来の古代氏族は没落の道をたどり始めており、安曇氏族もその例外ではなかった。安曇氏族の信濃進出の契機となった屯倉は廃止され、部民制も廃止された。最後の拠り所だった内膳司においても、高橋氏との抗争が激しくなっていた。

792年内膳司の奉膳だった安曇宿禰継成が佐渡国へ配流となり、奉膳職をめぐる高橋氏（膳臣）との永年の抗争に最終的に敗北することにより衰退の道を辿る。この後も日本後記などに何人かの安曇宿禰氏の名が見えるが王権の中枢にはおらず往時の勢いはない。内膳司の職を失うということは海人のネットワークを失うということであり、部民制の廃止も相まって勢威の失墜を招いた。安曇野においては安曇氏から自立して豪族化した安曇部氏に郡司の地位を奪われるに至って、明科の拠点からの退転を余儀なくされた。全国の安曇氏族ゆかりの地においても安曇部氏や海部氏など他氏族に取って代わられるなどの影響があったと考えられる。

安曇郡における安曇部氏の興隆

大化の改新により部民制は廃止されていった。天智9年（670）の庚午年籍以後、すべての民が戸籍に登録されるようになると、部称は個人の姓として継承されることになる。もともと安曇部は阿曇連氏の私有民ではなく、阿曇連氏が内膳司として朝廷の組織の中に位置づけられていたがために管掌を認められていたもので、隷属関係にあった訳ではないとされる。即ち、安曇部氏は内膳職としての阿曇連（宿禰）氏に鮭等の御食の食材の貢納を義務づけられることによって支配されていたと考えるべきだろう。

阿曇連氏の進出以前からの先住民・安曇部氏は部民制の廃止と班田収授法など律令制の進展によって阿曇連氏の支配から脱して力をつけて郡司となったと考えられる。郡司には大領・少領・主政・主帳の四等官があり、正倉院御物の調布の墨書銘（764年）から安曇郡には郡司主帳従七位安曇部百鳥がいたことが明らかになっている。安曇郡は4郷からなる小さな郡だが大領または少領の上司が存在した可能性はあり、それが安曇連氏だとも考えられる。しかし、安曇部百鳥が内位であることから、大領・少領も安曇部氏だったと考えられ、8世紀には安曇部氏が阿曇連氏に代わって安曇郡を支配していた可能性が高い。郡司は、地方豪族が世襲的に任命され、終身官だった。徴税権のみならず、保管、貢進、班田の収授も任されるなど絶大な権限を有していた。栄町遺跡の集落と潮古墳群の廃絶と、上手屋敷遺跡の集落の出現は旧勢力の安曇連氏と新勢力の安曇部氏との交代によるものと考えたい。

安曇連氏が退転した後、安曇部氏は栄町遺跡付近の安曇連氏が造った郡衙（郡家）

の地を忌避、郡権力を掌握したことを誇示するために新たに上手屋敷遺跡に郡衙を設け、明科廃寺を修築して郡寺とした。この時代には孝徳天皇の薄葬令によって既に古墳の築造は廃止されていたから、安曇部氏の古墳は存在しない。また、上手屋敷遺跡とほぼ同時期に出現した北村遺跡には、溝と柵列で区画された規模の大きな掘立柱建物と高床式の倉庫、馬の墓と井戸などがあり有力者の館があった(1)とされている。明科から退転した阿曇連氏か力をつけた安曇部氏の集落とも考えられるが、今後の検証を待ちたい。

穂高神社を阿曇犬養氏と安曇氏で共同祭祀

明科を退転した安曇連氏は阿曇犬養連氏を頼って犀川を渡った。さらに中央で内膳職を失って衰退した安曇宿禰氏も宝宅神を従五位上に叙するとの勅を手土産に安曇野にやってきて(11)、安曇氏族の祖神を阿曇犬養氏とともに共同で祭祀することになった。阿曇連氏と阿曇犬養氏の混同はまさにこのことに起因すると思われる。

8, 終わりに

安曇氏族の隆盛と安曇野進出を蘇我氏との関係で捉え、安曇連氏と阿曇犬養連氏との連携で安曇野を支配して明科廃寺の創建に至り、後に安曇部氏に取って代わられたことを概観した。

明科廃寺の創建を安曇氏族によるものと仮定して、これまで言われていた7世紀の第3四半期として蘇我氏の盛衰との関係性において論考していたが、原明芳の論稿が発表されるに及んで、その前提に疑問符が付くことになってしまった。第4四半期の場合についても敢えて推論を試みたが蘇我氏との関係性が希薄となったことは免れ得ない。考古学的成果を援用することの難しさを痛感した

いずれの年代となるかは今後の科学的調査を待つにしても、安曇氏族が蘇我氏との関係によって復活して安曇野に進出して明科廃寺を創建するまでになったことだけは雑駁ながら試論として提起できたのではないか。しかし、先学の推論の上に推論を重ねた感も強く、大方の批判・反論に耐えられるとは必ずしも考えていないが、安曇氏族について再度整理して論議する契機となれば嬉しい。

以上

- (1) 原 明芳 「安曇郡の古代を考える」 2022年5月：信濃第74巻第5号
- (2) 刈間健志 「安曇族はいなかった？」 2020年4月安曇人16号
- (3) 金井 恂 「安曇氏族の興亡」2017年4月
- (4) 前川昭久 「渡来人と蘇我氏」 1991年3月：蘇我氏と古代国家
- (5) 前之園亮一 「蘇我氏の同族」 1991年3月：蘇我氏と古代国家
- (6) 宝賀寿男 「古代氏族系譜集成」1986年4月
- (7) 黛 弘道 「犬養氏及び犬養部の研究」 1965年11月：学習院史学
- (8) 笹川尚紀 「信濃の安曇」2003年信濃55巻7号
- (9) 桐原 健 「推論・信濃の屯倉と蘇我氏」 2013年信濃3次65巻2号

- (10) 宮地直一「穂高神社史」1949年12月
- (11) 栗岩英治「諏訪神社以上に封戸を賜った信濃の一 古社」
第2次信濃 1944年7/8月合併号
- (12) 一志茂樹「信濃上代の一有力氏族・犬甘氏について」信濃3巻5.6号
- (13) 百瀬新治「国府の対岸－信濃国安曇郡南部における古代集落の変遷－」
2005年3月長野県立歴史館研究紀要
- (14) 大和岩雄「信濃古代史考」2013年11月
- (15) 栗岩英治「穂高神社の研究」1939年：信濃教育632号
- (16) 川崎克之「白村江の海戦と阿曇比羅夫」2020年10月：安曇人17号

<参考書籍>

- * 「蘇我氏と古代国家」 黛弘道・編 吉川弘文館 1991年3月20日
- * 「蘇我氏の古代」 吉村武彦 岩波新書 2015年12月18日
- * 「蘇我氏－古代豪族の興亡」 倉本一宏 中公新書 2015年12月20日
- * 「古代史講義」 佐藤信・編 ちくま新書 2018年1月20日

安曇誕生の系譜を探る会
会報「安曇人」21号
2022年10月発行